

東大阪中央ロータリークラブ

創立 昭和47年2月20日
例会日 毎週月曜日 12:30～
例会場所 シェラトン都ホテル大阪 3F
事務局 大阪市天王寺区石ヶ辻町2-8
〒543-0031 クレアツィオーネ上本町 704号
TEL : 06-6772-2320
FAX : 06-6772-2327
E-mail : hcrc@at.wakwak.com



会 長 小川 高 弘
会長ノミニー 宮田 照 男
副 会 長 金子 勝 信
幹 事 中 村 徹
会報委員長 瀧田 浩彦

Rotary Serving Humanity

人類に奉仕するロータリー

2016～2017 年度 国際ロータリー会長 ジョン F. ジャーム

第 2045 回例会 平成 29 年 4 月 8 日 (月曜日) 第 32 号

本日の例会 4月8日(土) 第2例会

インターシティー・ミーティング 第4組 ロータリーデー

ホスト：東大阪中央ロータリークラブ

テ ー マ : 『わたしたちの奉仕』

「経験分かち合いと成長のために」

場 所 : 「シェラトン都ホテル大阪」

会 員 集 合 : 11時30分 4階「大和の間・東」

IM第1部 : 4階「浪速の間・西」13:30～

第2部懇親会 : 4階「浪波の間・東」17:00

次回の例会 4月17日(月) 第3例会

◎卓 話 「ウクライナは今

～EUとロシアの狭間で」

◎ゲストスピーカー 小野 元裕様

担当：岩崎史郎会員

前回の例会 4月3日(月) 第1例会

会長挨拶 会長 小川 高弘

みなさん、こんにちは。

今週末の土曜日は今年度のメインイベントであります、当クラブホストのIMロータリーデーがここ都ホテル4Fで開催されます。浅野IM実行委員長はじめ皆さんのお力をお借りして本日まで幾度となく打ち合わせをしまっていました。皆さんご協力有難う御座いました。

今回のIMロータリーデーはテーマを「わたしたちの

奉仕」「経験の分かち合いと、成長のために」とし、今までとは違い試行を変えた各クラブ参加型で奉仕活動を発表して頂くIMロータリーデーとさせて頂きました。

各9クラブにおきましては、その様な事で多大なご協力を頂きましたのでホストクラブと致しましては何としても当日は全員参加でお願いし成功裡に終わらせたく思っています。どうぞご協力の程、宜しくお願い致します。

出席報告 飯田会員

本日の会員数	22名
本日の出席者数	18名
本日の出席規定適用免除会員	9名
本日の出席率	85.76%
2月20日の修正出席率	93.18%

二コニコ箱報告 SAA 岩橋 竜介

小川会長 今週末のIMロータリーデー宜しくお願い致します。

中村幹事 4/8(土)IM代4組ロータリーデーが開催されます。皆様一丸となって成功したいと思います。宜しくお願い致します。

林 会員 花園会で優勝しました。ありがとうございます。

瀧田会員 いよいよ4月に入りました。92才になり献血したくても受け入れてくれません。残念ですが大人しく生きておきます。

浅野会員 4月2日で満71才になりました。私の父親が71才の時は私ほど若く見えませんでした。が、あと何年生きられるのでしょうか。献

血もさせてくれないし!!

- 岩崎会員 4月に入りました。今月も宜しくお願ひ致します。IM全員で頑張りましょう。
- 細川会員 ゴルフコンペで2位になりました。馬券もいただきしました。

幹事報告

中村 徹

1. 本日、例会終了後、5階サルビアの間にて第10回定例理事役員会を開催致します。理事役員の皆様には宜しくお願ひ致します。
2. 続きましてIMRD実行委員会も開催致します。実行委員会委員の皆様には宜しくお願ひ致します。
3. 4月5日(水)継続米山奨学生合同オリエンテーションはわたくしが出席して参ります。
4. 4月8日(土)のIMロータリーデーには会員の皆さまには11時に集合して頂きますようお願い致します。

卓 話 「献血の現状」

大阪府赤十字血液センター献血推進一部

推進一係長：池田 超様
主 事：猪上将之様

2013年度の献血者数は約516万人、総献血量は200万リットルで、ピーク時である1985年の約870万人から大幅に減少しています。献血量が減っても需要を満たすことができているのは、医療の高度化と献身体制の変化に要因があります。かつて大量の血液を必要とした手術は、医療技術の進化で切開すること自体が少なくなったことに伴い、必要な血液量が減少しました。現在、手術などで使用される血液量は、全体の3%ほどです。

また「以前は出血と同量の輸血をしていましたが、いまは必要な分を補う方針になっている」(厚生労働省医薬食品局血液対策課)というように、輸血の現場にも変化が見られ、さらに、血液中の特定の成分だけを献血する成分献血の導入なども血液の効率的な使用につながり、献血者数の減少をカバーしています。

現在、血液を多く必要とするのは、がんや白血病の治療です。これらは、少子高齢化で患者数の増加が見込まれるため、今後、血液の需要が増加するとの見方が強く、遠くない未来に、血液が不足する危機が訪れそうです。さらに血液不足が深刻化する模様です。

献血には、血液提供者の健康を考慮して69歳までの年齢制限が課されている。現在、献血者のメインである40～50代が年を重ね、献血ができなくなると、献血量がさらに減少することは明らかです。

40～50代の献血者が多いのは、社会的な環境によるところが大きい。現在の献身体制は、64年の閣議決定を嚆矢とする。きっかけは、駐日アメリカ大使のエドウィン・0・

ライシャワー氏が暴漢に襲撃されたことで、ライシャワー氏は手術で一命を取り留めたが、その際受けた輸血によって肝炎に感染しました。当時は厚生省や日本赤十字社といった公的機関による献血事業のほか、民間の血液銀行が血液を採取していました。

民間血液銀行は、採取した血液の販売で利益を上げているため、血液提供者の健康や採取された血液の品質を考慮せずに血液を採取していたのです。さらに、生活のために売血を繰り返す売血常習者が増え、売血を繰り返した血は血球部分が少なく黄色い血しょう部分が目立つため、「黄色い血」と呼ばれました。

ライシャワー氏が肝炎に感染したことで、売血が社会問題化し、政府主導の黄色い血追放キャンペーンが始まり、一連の活動が奏功し日本国内における輸血用の血液は、日本赤十字社による献血で100%賄われるようになりました。

こうした社会背景から、当時は会社を挙げて献血に協力する企業も多く移動献血車が来ると、手が空いている若手社員は上司から「献血してこい」と促されることもあったといえます。

しかし、最近では人口減少と高齢化というダブルパンチに加え、若者の献血離れが血液不足に拍車をかけている。献血は16歳から可能だが、10代の献血率はわずか6.3%だ。同じく20代も7.2%、30代は6.7%にとどまっています。

「こうした状況を改善しようと、政府は05年から『献血構造改革』と称する中期計画を立てるようになりました。今年、策定された中期目標では、20年までに20代の献血率を8.1%に、30代を7.6%に引き上げることが掲げられています」(同)

厚労省と日本赤十字社は若年層の献血者を増やすべく、移動献血車を増やして高校や大学への出張輸血を行っています。献血ルームでの採血とは異なり、学校などでの集団献血は安定的な血液の確保ができる上に若年層の献血啓発効果もあります。しかし、そうした移動献血車を敬遠する動きもあり「高校生の場合は、友達から外れたくないという思いが強いので、体調が悪くても『みんながやっているから、自分もやる』と無理をしてしまう子も多いようです。そうした事情から、最近では高校側から『献血車はご遠慮いただきたい』という申し出が目立つようになってきました」(同)

移動献血車が高校から遠ざかることで、若年層における献血の理解は進みにくくなっています。移動献血車が高校から遠ざかることで、若年層における献血の理解は進みにくくなってしまふ。また、若者の献血離れを加速させる要因は、ほかにもある。